

死後の世界 第一部 死とは何か 第1章 人の構造 ③

この学び全体のアウトラインと本日の内容

第一部 死とは何か

- 第1章 人の構造
- 第2章 死についての聖書的理解
- 第3章 非物質的部分【靈魂】の不滅

第二部 人は死んだら、どこへ行くのか

- 第1章 肉体の死後、人の靈魂はどこへ行くのか
- 第2章 復活までの中間的状态

第三部 死者の復活

- 第1章 教会の携挙【新約時代の信者の復活】
- 第2章 大患難期の後の75日間【旧約時代の信者と大患難期の殉教者たちの復活】
- 第3章 メシアの王国【信者は肉体の死を経ずに全員が変換】
- 第4章 王国の後【不信者の（第二の）復活、不信者は第二の死へ】

第四部 新しい天と新しい地での永遠の生活

死後の世界について理解するためには、まず「死」とは何か、を知らねばなりません。そのことを学ぶのが第一部です。

第一部の第1章では、人の構造を見ます。人は、大きくは二つ、物質的部分と非物質的部分とから成ります。物質的部分とは「からだ」です。非物質的部分には、魂や霊など6つの要素があり、これに罪の性質が加わって、全部で7つの要素から成ります。福岡集会では、日本人にわかりやすいように、非物質的部分全体を指すときには「靈魂（れいこん）」と呼ぶことにします。

第2章では、肉体の死とは体から靈魂が離れること、第3章では、靈魂はなくならないで、一人ひとり意識を持続し、新しい体を受けるときを待っている、といったことを学びます。

第二部は、肉体の死から復活までの間、靈魂はどこで、どのような状態にあるか、です。

第三部は、死者の復活です。信者の復活は、幸いなる第一の復活とも呼ばれます。不信者も、時期は後になりますが、復活します。ただし、これは恐るべき第二の復活です。その行先は「火の池」、永遠の苦しみの場所です。聖書ではこれを、「永遠の滅び」、また「第二の死」と言います。信者には第二の死はありません。

第四部は、私たち信者の最終的な行先、新しい天と新しい地です。

本日は、第一部 第1章 「人の構造」の3回目です。第1回で、人の起原、構造、その継承、物質的部分【からだ】についての7つの用語、そして非物質的部分についてその全体像を説明しました。第2回から、非物質的部分の7つの要素をそれぞれ詳しく見ていきます。前回は、魂と霊でした。本日は、「心」と「肉」です。

前回までの内容から、非物質的部分【靈魂】についての要点

1. 非物質的部分の7つの要素 注意：聖書の翻訳では別の英語・日本語のことがあります

	日本語	英語	ヘブル語	ギリシア語
1	魂	Soul	ネフェシュ	プシュケイ
2	霊	Spirit	ルアハ	プニューマ
3	心	Heart	レブ	カルディア
7	肉	Flesh	バサル	サルクス
4	思考	Mind	(レブ)	ノウス、フェロネマ
5	意志	Will	ラツオン	テレイマ
6	良心	Conscience	(レブ)	スネイデシス

2. 魂と霊との共通点

- (1) 共に、「非物質的な、かつ個人的な存在」である。
- (2) それぞれに 16 通りの使われ方がされているが、互いに重なり合う用法がある。
- (3) 並立構文（同じ内容を別のことばで繰り返す）の中で、同義語として両者が使用されることもある。
 - ① ルカ 1：46～47 マリヤは言った。「わが魂は主をあがめ、わが霊はわが救い主なる神を喜びたたえます。」
 - ② 創 49：6 「わが魂よ。彼らの仲間に加わるな。わが心（原文は、霊）よ。彼らのつどいに連なるな。」

3. 魂と霊との相違点

- (1) 魂はその人の体や地上的環境との関連が強調されるのに対し、霊は神との関係において使用されることがある。
- (2) 新約聖書では、「魂的な人」に対し「霊的な人」、「魂的な体」に対し「霊的な体」、といった対照的な使われ方をする。

本日の内容 心と肉

心（こころ）

ヘ	レブ	ギ	カルディア
---	----	---	-------

1. 3つの異なった意味で使われる

- (1) 2回だけ、人の心臓を指す（Ⅱサム 18：14、Ⅱ列 9：24）
- (2) 何かの中心部、内側の部分を指す
 - ① 出 15：8 海のレブ 「海の真ん中で」
 - ② 申 4：11 天のレブ 「中天に」（天の中心部、天の中）
 - ③ マタ 12：40 地のカルディア 「地の中」
- (3) 人の非物質部分の 7 つの要素のひとつである「心」を指す。聖書では、この意味で用いられることが最も多く、700 回以上。また、7 つの要素のうち、「心」が最も広い活動領域を含んでいて、それは次の 5 つである。
 - ① 知的活動をする領域（創 6：5、ヘブル 4：12、マタ 15：19）
 - この領域では、心は「思考」と重なり合っている。

- 心は、信者が神のことばについての知識を大切に納める領域 (詩 119:11)
 - ② 感情が動く領域 (申 6:5「愛する」、詩 37:4「欲する」、詩 104:15「喜ぶ」、箴言 14:10「苦くなる」、ロマ 9:2「悲しみに満たされる」)
 - ③ 意志が働く領域 (出 7:23「選択する」、出 8:15「堅くする」、出 14:5「選択を変える」、申 4:29「主を切に求める」、II コリ 9:7「心で決めたとおりに」)
 - この領域では、心は「意志」と重なり合っている。
 - ④ 霊的な活動の領域
 - イザヤ 6:10、ヘブル 4:7、いずれの箇所も霊的真理に対して心をかたくなにすることを語る
 - エゼ 36:26 ここでは「新しい心」について語られる。新しい心は、神のことばや神の導きに対して開かれている心である。
 - ⑤ 罪が活動する領域
 - 創 8:21 心には罪が住んでいる。人の心の思い計ることは、初めから(人が若いときから)悪い。
2. 聖書は、不信者の心と信者の心とははっきりと区別している。
- (1) 不信者の心は・・・
- ① 悪い (エレ 3:17)
 - ② 何よりも陰険で、直らない (エレ 17:9)
 - ③ 割礼を受けていない (使 7:51)
 - ④ かたくなで悔い改めない (ロマ 2:5)
 - ⑤ かたくなである【霊的真理を受け取れない】 (エペ 4:18)
 - ⑥ 自分の心を欺く (ヤコブ 1:26) 「宗教に熱心である」とは、儀式的形式的に整っていることで満足する人。このような人は真の信者ではない。自分の舌を制御することをしないのが特徴。こういう人の心は、「これでいいのだ。」と自分の心に思い込ませる。「自分の心を欺く」とは、その意味。
- (2) 人は、信者になると、新しい心を持つ。不信者のときにはできなかったことを、できるようになる。
- (3) 信者の心は・・・
- ① 神を愛することができる (マタ 22:37)
 - ② 心の割礼を受ける (ロマ 2:29)
 - ③ 神の愛が心に注がれてあふれ出している (ロマ 5:5)
 - ④ 伝えられた教えの規準 (=使徒たちの教え) に服従する (ロマ 6:17)
 - ⑤ 心に信じて義とされる (ロマ 10:10)
 - ⑥ 聖霊が住まわれるのは心である (II コリ 1:22)
 - ⑦ キリストが住まわれるのも心である (エペ 3:17)
- (4) しかし、信者の心もかたくなになることがある (ヘブル 3:8、13)
- ① ヘブル人への手紙の著者は、信者たちに明確に警告する「心をかたくなにしないように」

- ② 同時に、著者は、彼らの心は、「真心」＝真実であり、「血の注ぎを受けた」＝きよめられた、と言って、彼らを励ましている（ヘブル10:22）
3. 心は、7つの要素の中でも最も広い意味を持っているので、魂や霊とも重なり合う。また思考、意志や良心とも重なり合う。心、魂、霊、思考、意志、良心、これら6つの要素をそれぞれ切り分けるとか、働きを区別することは不可能である。それら6つの要素は、すべてオーバーラップしており、それらすべてが一体となって、人の非物質的部分、霊魂を構成している。

肉（にく）

◡バサル ◡ギサルクス

1. 「肉」という用語は、次の2通りの使い方。
- (1) 人の皮膚または身体全体を指す場合
- ① 創世記2:24、6:3、7:21、29:14
 - ② ヨブ19:26
 - ③ 詩56:4、63:1
 - ④ マタ16:17、26:41、ヨハ1:4、使2:31
 - ⑤ Iコリ15:39、50、Iテモ3:16、ヘブ5:7
- (2) 人の非物質的部分【霊魂】に関係して使われる場合
2. 聖書が「肉」という用語を人の非物質的部分【霊魂】に関係して使う場合、それが意味するところをまとめると、次の4つのポイントになる。
- (1) 肉の中には、善は住んでいない（ロマ7:18）。肉とは、霊魂の7番目の要素「罪の性質」である。罪の性質の中には「善」はない。
 - (2) 罪の性質である「肉」は、人の非物質的部分【霊魂】の中に住んでいて、霊魂の中の他の6つの要素すべてに影響を及ぼしている（ロマ8:1~11、ガラ5:16~21）。
 - ① 「肉によって無力になった」（ロマ8:3）とは、肉が他の6つの要素すべてに影響を及ぼしていて、その人の霊魂は神の律法に服従できない（8:7）ということ。
 - ② 「肉に従って歩む」（ロマ8:4）とは、罪の性質に支配されている不信者の生き方を指す。
 - ③ 「（御）霊に従って歩む」（ロマ8:4）
 - 信者になって新しい性質が与えられる。それを「霊」（ロマ8:6, 10）と呼ぶ。ロマ8章は、罪の性質の上に立って思考するのではなく、新しい性質の上に立って思考するように勧めている。「肉の思い」と「霊の思い」とを対比しているのは、そのためである。
 - ガラ5:16~18「御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。」・・・「肉の欲望」に対しては、「霊の欲望」は存在しない。欲望や情欲の分野では、信者は、内住の聖霊に従っていくように命じられている。

- (3) 罪の性質である「肉」は、完全に悪いものであって、新たにされる対象ではない。
- ① 信者になると、他の 6 つの要素はすべて新しくされる。肉だけは、新しくされる対象ではない。
 - ② 他の 6 つの要素は、人が造られたときに元々備えられたもの。肉はそれらとは異なり、人が墮落したときに入ってきたものである。
 - ③ 肉は、死のときに、消去される。信者が身体的に死ぬとき、その人の非物質的部分【靈魂】から「肉」という要素は永久になくなる。そして、信者の靈魂は、他の 6 つの要素を永遠に持ち続ける。
 - ④ 教会の携挙のときに地上で生き残っている信者は、一瞬のうちに身体が「栄光のからだ」に変換される。そのとき、その人の非物質的部分【靈魂】から、「肉」という要素は消去される。
 - ⑤ 地上での生涯において、人の靈魂は「肉」を含む 7 つの要素を持っている。しかし信者には、将来必ず、肉が消去されて、6 つの要素に戻る日が来る。それは、その人の身体的な死のときか、携挙で体に変換されるとき、である。
- (4) 「肉」をひと言でいえば、『人を、神にではなく自分自身に仕えさせる力』である。罪の性質は、人の目から見て良いことでも悪いことでも、何でもする能力を持っている。ただし、その人を神の称賛に与らせることはできない。
3. 「罪の性質」という用語は、聖書にない。これは、神学上の用語である。聖書の中で、罪の性質である「肉」を他のことばで表現しているのは、「古い人」である（ロマ 6:6、エペ 4:22、コロ 3:9）
- (1) 古い人・・・アダムを指す。アダムの墮落が、アダムの中に罪の性質としての「肉」をもたらした。アダム以降の人類はすべて、生まれた時から靈魂の中に「肉」を引き継いでいる。
 - (2) 「肉」という用語は、罪の性質そのものを指す。「古い人」という用語は、罪の性質の起原が、アダムの墮落にあったことを強調することばである。
4. 聖書は、不信者の場合と信者の場合とで、その人と「肉」との関係が全く違うことを教えている。
- (1) 不信者の場合
 - ① その人は、新しい性質は持たず、罪の性質しか持っていない。
 - ② その人が人生において行うことはすべて、罪の性質（肉）の上になされる。
 - ③ それゆえ、不信者は常に神にさからう。
 - ④ 不信者に選択の余地はない。その人は・・・自分が何かをするもしないも、また、人の目には良いことでも悪いことでも・・・すべてのことを罪の性質の上でのみ行う（ロマ 8:5~13、ガラ 5:16~17、コロ 2:11、1ペテ 2:11、ユダ 23）
 - (2) 信者の場合
 - ① その人の中には、まだ罪の性質は存在する。
 - 罪の性質は、信じたときに、消去されるわけではない。
 - 信者が死ぬか、携挙に際して地上で生きていて変換されるか、そのいづ

れかのときに信者の霊魂から「肉」は消去される。

- ② しかし、信者には、①の古い性質に加えて、新しい性質がその人の非物質的部分【霊魂】の中に住んでいる。古い性質「肉」が他の6つの要素に影響を及ぼしていたのと同様、この新しい性質もまた他の6つの要素すべてに影響を及ぼす。
- ③ 信者の場合、その人は選択権をもっている。古い性質の上で行動するのか、新しい性質の上で行動するのか、信者は何をやるにせよ、しないにせよ、いずれの性質の上に立つのかを選択できる。
 - 新しい性質は、神に仕える力であり、義を伴っている（ロマ6：18～20）。義を伴うとは、神のみこころにかなう、神が受け入れてくださること
 - 新しい性質の源は、神である（コロ3：10、Ⅱペテ1：4）
 - 新しい性質を指す用語は「新しい人」（エペ4：22～24、コロ3：9～10）
 - 「新しいひとりの人」（エペ2：15）は、「ユダヤ人信者＋異邦人信者＝教会」を指すので、混同しないようにしましょう。
 - 古い性質＝罪の性質を指す用語は、「古い人」（エペ4：22、コロ3：9）
 - 罪の性質＝古い性質＝「古い人」、これは決して新しくされない。それゆえ、信者には新しい性質が付与される必要がある。
- ④ 信者は、二つの性質を持っている。そのために信者の中で、二つの性質が衝突する（ロマ7：15～25、ガラ5：16～17）。その人の行動に対する主導権をどちらの性質が握るのか、絶えず争いが繰り広げられている。
- ⑤ 聖書は、信者に向けて、「古い人＝肉＝罪の性質」によってではなく、「新しい人＝霊＝新しい性質」によって歩むように励ましている。

肉についてのまとめ

1. 「肉」という用語は、人の身体を指す場合と、人の非物質的部分【霊魂】を構成する要素を指す場合とがある。
2. 人の非物質的部分【霊魂】を構成する要素としての「肉」とは・・・
 - (1) 罪の性質である
 - (2) それは、人の非物質的部分【霊魂】の中に、住んでいる
 - (3) それは、完全に悪いものであって、新しくされる対象ではない
 - (4) それは、人を神にではなく、自分に仕えさせる力である。
3. 聖書には、「罪の性質」という用語はない。それを意味する用語として使われるのは、「肉」と「古い人」である。
4. 不信者は、「肉」、「古い人」と呼ばれる罪の性質しか、持っていない。不信者がすることは何であっても、罪の性質の上に立ってなされる。
5. 信者は、「霊」、「新しい人」と呼ばれる新しい性質を与えられている。それは、神に仕える力であり、義を伴っている。
6. 信者は、新しい性質の上に立って歩むという選択権を持っている。